

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 綿織物ダカの魅力

(変わるネパールと変わらぬネパール：  
グローバル化した世界に暮らす, 第18回)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5118">http://hdl.handle.net/10502/5118</a>



最新デザインのダカ（2003年）。ダカ・トピーは連載第4、5、11回の写真を参照していただきたい。

# 変わるネパールと変わらぬネパール

## ——グローバル化した世界に暮らす——

第18回

ネパールの首都カトマンズに行くたび、立ち寄るようにしているところがある。ネパールの男性用帽子ダカ・トピーの専門店だ。ダカとは白地に赤、オレンジ、黒などに染めた緯糸を織り込み、幾何学模様をつけた手織り綿布だが、私のお目当ては、昔のダカ・ショール（カスト）を帽子（トピー）に仕立て直した希少品にある。店の主人によれば、口伝で旧家に眠る古いカストを探し当て、入手すると、損傷のない部分を使って3～4個の帽子をつくるそうだ。そのため、古ダカの帽子は常に在庫があるわけではない。また、しばしば織りのほつれや黄ばんだシミがある。

だがそれは、今日織られているダカにはない、自然染料の美しい色合いや伝統的な模様パターン、柔らかな肌触りをもつのだ。価格も異なる。ふつう新品の帽子は100円から、高級品でも1300円くらいで買えるが、こちらは2000円を下らない。おもしろいのは、古ダカの帽子には大きなサイズしかないことだ。それはこのような帽子を選び好んで買うのが、裕福な政治家など恰幅がよく、頭が大きな人に限られるからだそうだ。

洋服の普及にともない、ダカ・トピーを日常にかぶる習慣は、都市部を主として急速に衰退してきた。今では成人式など儀礼にのみ着用する人がほとんどだ。例外は王族や国会議員、上級公務

員など公務にナショナル・ドレスを着る人である。ダカ・トピーはちょうどネクタイのように、その人の趣味をあらわす公式衣装の一部なのだ。

ダカはもともと帽子だけでなく、女性のブラウス生地やショールとしても用いられてきた。これに注目したのが英国の政府開発援助プロジェクトである。1980年から東ネパールにおいてダカの研究と収集を進めるとともに生産を支援し、1983～85年にはロンドンの人類博物館で「ヒマラヤの虹」というダカの展示を開催した。それ以降ダカは、外国人が好む色調とデザイン、品質に改良が重ねられ、現在ではネパールの重要な土産物および輸出品のひとつになっている。

数年前、ネパール産のパシュミナ・ショールが世界的に大流行したことは記憶に新しい。だがそれは一過性のブームに終わったようだ。幸いダカのショールやテーブルクロスは、生産者の生活向上を目指すフェアトレードを主要な販路として、その魅力がゆっくりと世界に伝わっている。最新デザインのダカも好きだが、しばらくは古ダカの帽子との一期一会を楽しみたいと思う。

## 綿織物ダカの魅力

写真・文◎国立民族学博物館助教授 南 真木人

1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著／「〈都市的なるもの〉の現在」（東大出版会 2004年）、「嗜好品の文化人類学」（講談社 2004年）、「エスノ・サイエンス」（京大出版会 2002年）など。